公益財団法人 加古川市国際交流協会
〒675-0065　兵庫県加古川市加古川町篠原町21-8
TEL：079-425-1166
FAX：079-425-0200

令和５年度
加古川市青少年海外派遣
報告書

公益財団法人 加古川市国際交流協会
Kakogawa International Association

目　次

加古川市の姉妹都市　01

中学生海外派遣

中学生海外派遣　研修概要　02

派遣研修１０日間の記録　04

団員レポート　10

青年海外派遣

青年海外派遣　研修概要　32

派遣研修１１日間の記録　34

団員レポート　36

加古川市の姉妹都市

ニュージーランド・オークランド市

　オークランド市は北島の北部に位置し、ニュージーランド最大の都市です。民族構成はマオリ族を始め多岐にわたり、多様性に富んだ文化が育まれています。マヌカウ湾とワイテマタ湾の間に位置するオークランド市では、点在する島々、海岸、森林保護地などの自然が豊かに息づいており、誰もが気軽にレジャーを楽しむことのできる環境が整っています。
　加古川市は、1992年にワイタケレ市と姉妹都市提携しました。
ワイタケレ市は 2010年にオークランド市をはじめとする周辺の市町と合併し、現在のオークランド市となりました。これにより、加古川市とワイタケレ市の姉妹都市交流は、オークランド市との交流に引き継がれることとなりました。

加古川市が寄贈した平和の鐘

ブラジル・マリンガ市

　マリンガ市は、ブラジル連邦共和国南部のパラナ州に属し、綿密な都市計画に基づいて建設された新興都市です。原生林をそのまま残した自然公園（インガ公園）を街の中心に配し、縦横に走る道路には、すべて街路樹が植えられ、街全体が緑にあふれています。日系人が多いことでも知られ、政治、経済、文化等のあらゆる分野で日系人が活躍しています。
　加古川市とマリンガ市は、1973年に姉妹都市提携を締結し、今年で 50年を迎えました。市内には、加古川市との姉妹都市交流を記念して「加古川大通り」や日本庭園がつくられ、青年の相互派遣をはじめとする各種団体の訪問など、親密な交流が行われています。

1973年の姉妹都市提携調印

中学生海外派遣

次代を担う中学生を姉妹都市「ニュージーランド・オークランド市」に派遣し、学校訪問やホームステイなどを通じて国際的な視野を広げ、地域社会における国際協力の芽を育むことを目的とした、第３０回加古川市中学生海外派遣事業を実施しました。

研修概要　（事前研修～派遣研修～報告会）

（1）派遣生

１０名
小原　萌花、櫻井　唯子、正垣　陽向、高島　莉愛奈、塚本　さくら
徳田　瑛斗、長野　心美、西澤　こはる、野神　真愛、原　博季

（2）引率

清水　優也（神吉中学校教諭）、中嶋　由里、坂本　千種

（3）事前研修

１０名の派遣生は、訪問先の文化、習慣、言語などを調べ、学ぶことで、日本と違うところを発見して、相手を理解し、認めることの大切さを学びました。また、帰国後、自分自身ができる身近な国際交流を考える機会も持ちました。

７月　２日	オリエンテーション
７月　８日	訪問地研究
７月２３日	訪問地研究発表、英語研修、先輩の体験談
８月　１日	多文化共生研修
８月１０日	英語研修

（4）結団式

８月５日に中学生海外派遣と青年海外派遣の合同で開催。市長や市議会議長、教育長から激励の言葉をいただき、派遣生代表が意気込みを力強く宣誓しました。
国際ソロプチミスト加古川から現地で使用する記念品をいただきました。

（5）派遣研修

月　日	場　　所	内　　容
８月１６日	加古川～伊丹空港 ～成田国際空港	
８月１７日	オークランド	オークランド市内見学 ホストファミリープログラム
８月１８日	オークランド	ワイタケレスクール訪問
８月１９日	オークランド	ホストファミリープログラム
８月２０日	オークランド	ホストファミリープログラム
８月２１日	オークランド	ワイタケレスクール訪問
８月２２日	オークランド	オークランドタウンホール・日本庭園訪問、オークランド博物館見学
８月２３日	ハミルトン	ハミルトンガーデンズ見学
８月２４日	ハミルトン オークランド	ホビット村見学 スカイタワー見学
８月２５日	オークランド～成田国際空港～伊丹空港～加古川	

（6）事後研修

９月９日に開催。現地での経験を振り返り、今後どのように生かせるかなど意見交換を行い、自分たちにできる国際交流を考えました。また、報告会の発表内容をグループ別に検討し、以後、自主的に集まり報告会の発表準備をしました。

（7）報告会

１１月１９日に中学生海外派遣と青年海外派遣の合同で開催。それぞれのグループ別に発表し、発表後、中学生と青年、国際交流協会役員で座談会を行い、海外派遣で感じたこと、経験を通じて自分ができる活躍の場などについて意見交換をしました。

派遣研修10日間の記録

8月１６日（水）
徳田　璃斗

いよいよニュージーランドに旅立つ日です。台風の影響が心配でしたが、無事に出発することができました。私は加古川を出るとき、ワクワクと不安を抱いていました。伊丹空港を飛び立ち成田空港に到着した私たち。その後出国審査を通り、午後６時３０分頃私たちは日本を旅立ちました。
そして約１０時間半の長旅を経て、現地時間の朝８時頃オークランド国際空港に到着しました。私は税関でとてもドキドキしていましたが、税関職員の方が日本語で対応してくれたので安心して通過することが出来ました。バスで空港を離れて、私たちはオークランド市中心部へ向かいました。途中、小高い丘のうえからオークランド市を見下ろしたり、湾から大橋を見たりと楽しい時間を過ごしました。オークランド市内で昼食を食べ、ワイタケレスクールに向かいました。そこでホストファミリーと出会い、ホームステイ先に行きました。ホストファミリーは全員親切で、７日間安心して過ごせそうです。明日からは多文化共生を肌で感じる機会が増えると思います。明日に向けて、頑張りたいです。

8月17日（木）
髙島　莉愛奈

今日からいよいよオークランド！長い長い空の旅が終わり、ほっとひと安心しました。飛行機を降りると、一気に寒さが体に触れ、ニュージーランドに来た実感がいきなり湧いてきたとともに、不安もこみ上げてきました。
そして、市内見学。ラウンドアバウトという道路があり、日本でいう環状交差点で、信号がありません。信号がないのでルールがあり、時計回りの一方通行で、右から来る車が優先です。ラウンドアバウトを通ってみて本当に自分はニュージーランドにいるのだなと思いました。
いよいよホストファミリーと対面の時です。私は心配で心配で仕方がありませんでした。自分の英語が通じるのかどうか、日本語が一切通じない国でやっていけるのか。不安な気持ちしかありません。ホストマザーが迎えに来てくれた時、ああ、いよいよホームステイが始まるのだなと思いました。同時に、加古川へ帰りたい気持ちが少し出始めてきました。でも、ホストマザーのテンションが高く、不安な気持ちが全て吹き飛んでいきました。これからペアのさくらちゃんと協力してホームステイをがんばろうと思いました。

8月18日（金）
櫻井　唯子

ワイタケレスクールへ授業体験に行きました。
まず、ハカを披露してもらいました。写真も撮れないほどの迫力があり、とても印象に残りました。そして、挨拶をした後、みんなで南ゆソーランを披露しました。ワイタケレの生徒と同じぐらい迫力のある演技ができたのではないかと思います。
バディのエミリー、メリーと一緒に体育とアートの授業を受けました。みんな１２歳なのに背が高くて、大人びており驚きました。バスケットボールやサッカーなどをしました。休み時間のような雰囲気で、すごく盛り上がりました。アートの授業は、自由に話すことができ、音楽もかかっており、日本の美術の授業の、シーンとした静かな雰囲気とは大違いで楽しく感じました。
休み時間には、お弁当を食べたり、みんなでゲームをして遊んだりして、すごく楽しかったです。転んで、泥んこになったハプニングもありましたが、スクールのみんなと距離がとても縮まった気がしました。

8月19日（土）
野神　真愛

あらかじめ「やりたいことリスト」を作っていたので、動物園とショッピングに行くことになっていました。動物園では餌やりや、うさぎなどをなでることができました。日本よりも動物の種類と数が多かったです。途中でおばあちゃんの体調が悪くなり、ホストマザーが急きょ病院に行くことになりました。だから、ショッピングは翌日に行くことになり、私たちはホストシスターと一緒に学校でネットボールをしました。どのようにするのかを教えてくれて、とても楽しかったです。
次の日はショッピングセンターに連れていってくれました。日本では見たことのないものや食べ物が多くありました。お昼ごはんはチキンとL＆P（ニュージーランド発祥のレモン味の炭酸ジュース）でした。チキンはとても大きく、L＆Pは炭酸が飲めない私でもおいしく飲めました。旅行客向けのお店やニュージーランドでしか売っていないもの、本屋さんにも連れて行ってくれました。日本との違いがよくわかる1日でした。

派遣研修10日間の記録

8月20日（日）
長野　心美

待ちに待ったホストファミリーデイがいよいよ始まりました。
学校訪問１日目、まずオークランド動物園に連れて行ってもらいました。王道のゾウ、キリン、シマウマ。珍しいヤマアラシ、クモ。そしてニュージーランドと言えばやっぱり国鳥のキーウィ。様々な動物をホストファミリーと楽しく見て回りました。午後からは家でスーパーボールすくいをして遊びました。机の上にバスタオルを敷き、あちこちに水を飛び散らしながら遊びました。さらに水に洗剤を入れたことをきっかけに、スーパーボールすくいはいつしかシャボン玉大会へと変わっていき、ホストシスターたちと大爆笑しました。そのあとはお菓子をみんなで食べたり、折り紙をしたり、ディズニー映画を見たりしてゆっくりくつろぎました。映画の登場人物がジョークを言ったときにみんなと笑いあえたのがとてもうれしかったです。ホストファミリーと心の距離がぐんと近くなったと感じた日でした。

8月21日（月）
原　楠季

学校訪問２日目、英語や数学、「日本について調べる」という授業を受けました。日本と同じような授業内容でしたが、一日中授業を受ける中で驚くことがたくさんありました。
例えば、授業中に様々な意見交換をしたり、好きな場所や床に座ったまま授業を受けていたりと、多くの生徒は自由に授業に取り組んでいたことです。
また昼食を３回ほどに分けて、各自でとっていたことや休み時間がとても長くて休憩時間が多いことにも衝撃を受けました。自由でのびのびとした学校生活に羨ましさも感じました。
休み時間にはバディのアニーカや彼女の友達とネットボールをしたり、お互いの趣味や好きなことを話したり、日本語を少し教えたりしました。アニーカたちが日本に興味をもってくれたことが、嬉しかったです。
アニーカは、私が英語を聞き取れず何度も聞き返しても、変わらず笑顔で親切にしてくれて、 色々な先生が私を助けてくれて、ニュージーランドの人たちの優しさをとても感じることができた一日になりました。

8月22日（火）
西澤　こはる

この日は、タウンホールを案内していただき見学しました。そこで挨拶をしたのですが、私の英語を市の職員さんがうなずきながら真剣に聞いてくださって嬉しかったです。タウンホールはオークランド市内でもかなり古い建物だそうです。石灰石を使用しているそうで、１００年以上も前に建てられたらしいのですが、全くそんな風には見えませんでした。
その後、博物館でマオリ族の踊りである「ハカ」を見ました。とても迫力があり、感動して私もやってみたいなと思いました。実際にマオリの文化に触れることができ、とても貴重な体験でした。その後のお昼ご飯の最中、とあるメンバーが爆弾発言をしたのでみんな大盛り上がりでした。内容は私たちだけの秘密です。午後からは、日本庭園の視察をしました。そこで南中ソーランを踊りました。ヘンダーソンの地方委員会の議員の方々も、パフォーマンスでマオリの歌を披露してくれました。マオリの文化では日本と同じようにおもてなしの精神があるそうです。優しい感じの曲調でいい歌だと思いました。

8月23日（水）
塚本　さくら

今日は、ホストファミリーとのお別れの日でした。ホストシスターやホストブラザーが泣きながら手を振ってお別れしてくれました。ホストファミリーと別れた後、バスでショッピングモールに行きました。そこで、ホーキーポーキーアイスを食べました。ずっと食べたいと思っていたものだったので、食べることができてとても嬉しかったです。キャラメルのような味でとてもおいしかったです。ショッピングモールで買い物をした後、ハミルトンガーデンズに行きました。ガーデンズに、日本庭園など様々な国のガーデンがありました。一番印象に残っているのはインドのガーデンです。青い空に白色の建物が映えてとても綺麗でした。そこで、インドの方々と一緒に写真を撮ってもらい、よりインドに来たような感じがしました。ガーデンズは、とても素敵な場所でした。ホテルでは、皆で南十字星などのたくさんの星を見ました。綺麗な星空を皆で見たことはとても良い思い出です。

8月24日（木）
小原　萌花

ホテルから移動し、私たちはホビット村に行きました。ロードオブザリングの映画は見ていないので、分かるかなーと思っていたけれど、行ってみると現地のガイドさんが解説してくれて分かりやすかったです。全部が小さく再現されていて本当に可愛く、偽物の木や洗濯物が干してあって面白かったです。そこでジンジャー入りのとても炭酸のきつい飲み物を飲み、炭酸が苦手な私でもおいしいと感じました。私たちが行った時、ちょうど工事で広場が見られなかったので、ホビット村からみんなとおそろいの大きなコップをもらえたのでうれしかったです。坂があって登るのが少し大変だったけれど、みんなと話しながら行くとすぐ登り終わりました。丘の一番上から見る景色は忘れられないほどきれいでした。ホテルの夜ご飯がとてもおいしくて最高でした。夜ご飯の後、みんなで部屋に集まってＬ＆Ｐやポテトチップスを食べて、話したことがとても楽しかったです。

8月25日（金）
正垣　陽向

ハミルトンからオークランドへ戻り、向かったのは有名なスカイタワーでした。展望台からは市内の景色が一望でき、オークランドに到着した初日を思いだし、派遣研修があっという間だったな、と寂しい気持ちになりました。
お土産ショップでは、団員全員でお揃いのキーウィバードのぬいぐるみを買いました。
ぬいぐるみのボタンを押すと、マオリのハカが流れます。博物館で体験した思い出を持ち帰るようで記念になり、団員との絆が深まったように感じられ嬉しかったです。
空港近くのホテルへ移動し、８日間とてもお世話になったガイドさんへ、サプライズをしようと、団員で寄せ書きを用意しました。
翌日、寄せ書きを渡すと、空港から出発の際、「いってらっしゃい」と、見送ってくださり、また来たいという感情が込み上げてきました。

派遣研修10日間の記録

忘れられない貴重な経験と思い出

加古川中学校　　小原　萌花
3年

私は、母から若い時にニュージーランドに語学留学をした話を聞いて、私も行ってみたいと思い、加古川市中学生海外派遣事業に参加しました。不安もありましたが、行く前からみんな明るくて仲が良く、このメンバーなら大丈夫だと思うことができました。

出発の朝。私はみんなの前であいさつをさせていただきました。往路、成田からの１０時間のフライトは思っていたより大変でした。

ホストファミリーは、９歳のシスターと６歳のブラザーがいました。ブラザーはとてもやんちゃで、初日から戦いごっこをしました。最初は聞こえる英語がとても速く、日本で習う文法も伝わらないことがあり、不安になったけれど慣れてくるにしたがい、だんだんと聞き取ることができ、少しずつ自信も湧きうれしかったです。

学校に行くとマオリの歓迎のあいさつを見せてくれ、すごい迫力でした。色々な年齢の生徒がいて、みんなフレンドリーで日本と比べ自由な感じでした。

学校訪問の最初の時間は、バスケットボールをしました。私のバディ（学校体験の手助けをしてくれるパートナー）のベルは年下でしたが、大人っぽく初めは言葉が通じず心配だったけれど、スポーツをしているうちに打ち解けていくことが出来ました。

ニュージーランドの学校では、２時間目の後にモーニングティータイムというお弁当の一部を食べることができる時間がありました。そのお弁当も果物やパン、お菓子といった内容で、日本との文化の違いを感じました。

私の苦手な数学の授業では、ただでさえ英語が早く難しかったので、本当に頭が混乱しました。また、マオリ語の授業もあり、マオリ語と日本語で体の部位の言葉を習い、自分の母国語をバディに教えることができたことがうれしかったです。

金曜日はフライデーナイトといってパーティーをする日だそうです。私たちのホストマザーは別の派遣生のホストマザーと仲が良く、二つの家族でピザを頼み一緒にご飯を食べて、楽しかったです。

ビーチとスーパーマーケットに行ったことがホストファミリーデイでの一番の思い出です。ビーチは言葉では表せないほど綺麗でした。

出発時のあいさつ

一番の思い出のビーチにて

スーパーマーケットは大きくて、日本のコストコのよう広く、派遣生の西澤さんと一緒にお土産をたくさん買いました。ホストファミリーが車で色んなところに連れて行ってくれ、車窓からの街並みを見ていると、ニュージーランドは日本のように集合した住宅街が無く、道の通りに家がたくさん並んでいて、土地の面積が家の面積の何倍も広く、一階建ての家が多かったです。

日本から持って行った知育菓子（簡単な工程で子供でも自分で作って楽しめる砂糖でできたお菓子）をホストシスターたちと一緒に作ったことも良い思い出です。知育菓子で寿司を作りましたが、「作るのは楽しいけど味はあんまりだね」と言われ、少しショックでした。また、日本に比べご飯とご飯の間が短く、家で食べるご飯はとてもおいしかったのですが、おなかがいっぱいになっていることもありました。

私は、今回ニュージーランドに行き、様々な経験をする中で、「文法が違っていても伝えたい、話したいという気持ちがあるだけで人と繋がることができる」と自分に自信がつきました。そして、ためらいなく自分から挑戦できるようになり、私の人生の中でとても貴重な経験になったため、将来に繋げたいと思います。

ホストファミリーと日本のお菓子作り

思い出の10日間

白陵中学校　　櫻井　唯子
2年

５回の事前研修で派遣団のみんなと仲を深め、ついに出発の時がやってきました。ニュージーランドに行けることが決まってから、出発まではすごく早かった気がします。飛行機からは空しか見えなかったのが、地上にニュージーランドが見えてくると、とてもワクワクしました。長いフライトが終わり空港に着くと、吹き抜ける冷たい風を心地良く感じ、本当にニュージーランドに来たんだということを実感しました。

オークランドの街は都会ですが、少し郊外に出ると自然がいっぱいで、牧草地帯の緑が広がり、どこにでも羊がいたりしてのどかな雰囲気が漂っていました。一方で、建物やその内装はカラフルで明るく、その景色一つ一つがとても新鮮でした。
私が特に印象に残った出来事は３つあります。

ホストシスターとホストブラザーと

１つ目は、ホストファミリーとの対面です。出発前は、ホストファミリーの名前しか知らなかったので、どんな家族なのか、仲良くなれるのか、とてもドキドキしながら待っていると、ホストマザーとシスター、ブラザーが迎えにきてくれました。ホストシスターと車の中でおしゃべりをしました。最初はホストファミリーの話す英語が早すぎて、全く英語として聞き取ることが出来ず、とても不安になりました。しかし、家に着いたときに、ホストシスターがハグをしてくれて、初対面でのハグにはじめは驚いたけれど、歓迎してくれている気持ちがとても嬉しかったです。

２つ目は、ワイタケレスクールでの学校体験です。体育やアートの授業に参加させてもらい、休み時間には、バディやその友達と大人数でたくさんのゲームをしました。日本ではしたことがないゲームもたくさんあって、やり方がよくわからないこともあったけれど、みんな丁寧に教えてくれて、とても優しかったです。また、日本の学校では、休み時間は普通同じ学年の友達と過ごすことが多いですが、ここでは５歳ぐらいの小さい子供から高学年のバディまでみんなで一緒に遊んでいてとても驚きました。

３つ目は、日本に帰ってきたときです。たった１０日間だけだったのに、日本に帰ってきて、裸足で家の中を歩く感覚やおふろの湯船につかった時、ちょっとした違和感を覚えました。日本に住んでいたら当たり前だったことが、とても新鮮に感じられました。

日本のお土産に大喜び

この派遣を通じて私が学んだことは、何でも挑戦してみることの大切さです。
まず、応募してみないとこのような貴重な経験を得ることはできなかったし、英語で会話できるか不安でも、諦めずにとにかく聞き取ろうと努力すれば相手も伝わるまで丁寧に話してくれました。また、生活習慣の違いについても、例えば、土足の教室の床に落ち葉がたくさん落ちていてもみんな慣れた感じで地べたに座っていたので、最初は少し違和感を覚えましたが、それでも、相手にとってこれは普通のことなんだと思って真似てみると自然とみんなの輪の中に入ることができました。
こうした一つ一つの体験から得られた気持ちを大切にして、これからも様々なことにチャレンジしていきたいと思います。ホストファミリーやバディとの会話の中で、相手の英語が聞き取れなかったり、自分の言いたいことがうまく伝えられなかったりと、英語力のつたなさを実感して悔しい思いをしたことがたくさんあったので、もっと真剣に勉強して自分の語学力、そしてコミュニケーション力を高めたいと強く思いました。

バディのエミリーと

優しさに包まれた貴重な経験、感謝の10日間

加古川中学校　　正畑　陽向
3年

ニュージーランド派遣生に決まってから、嬉しさと共に緊張と重圧を感じて不安でした。しかし、帰国後に、ニュージーランド派遣の１０日間が一生忘れられない楽しい思い出となったことに、感謝の気持ちでいっぱいです。

英語が伝わるのか、どんなホストファミリーなのだろうか、とワクワクと緊張の中、オークランドに着くと、英語ばかりの街並みを見て、ああ、海外に来たんだなと、実感が湧きました。
ホストファミリーと対面したとき、とても優しそうなホストマザーの笑顔とハグで、安心しました。子供たちも初めは緊張した様子で、僕から勇気を出して話かけてみても、なかなか続きませんでした。しかし、子供たちからバスケットボールをしようと誘われました。僕は、スポーツが好きで球技も得意なので、楽しく交流ができ、すぐに仲良くなれました。それから、よく話もできて、弟のように思いました。

2対１の力比べ

ワイタケレスクールでも、現地のバスケットボールの上手な生徒と１対１の競争をして、引き分けると、ワー！っと、みんなが喜んで、次々と声をかけてくれ、とても盛り上がりました。それがきっかけで、友達も増え、ニュージーランドの生徒は、みんなフレンドリーで明るいと思いました。

ホストファミリーデイに子供たちがサッカーの試合を見に行った時、マオリのおばあちゃんが応援に来ていました。同じチームメイトのご家族のようでした。おばあちゃんは僕たちに声をかけてくださり、マオリは先住民であり、ワイタケレに多くの年配のマオリ族が住んでいると教えてくれました。ニュージーランドには、移住者が多いことは知っていました。このサッカーの試合を応援に来た観客の中にも、マオリ族の方がいて、他の国からの移住者もいるのだと、気が付きました。

ニュージーランドでは、先住民のマオリ族も、新旧の様々な移住者も、それぞれ日常を楽しんでいるんだな、と実感しました。スポーツは、世界共通で、民族や国、言語が異なっていてもみんなで楽しむことができ、意思を共有できることは、素敵な事だと思いました。とても貴重な経験だったと、感じています。
英語については、授業で聞く２倍の速さで喋る声に翻弄されながらも「わかる単語を聞き取れるだけ聞き取って、

モーニングティータイムにパティと

とにかく話してみよう。」と思いながら過ごしました。２日目からは、耳も少し慣れたのか、速くしゃべる声でも、聞き取れるように感じました。僕にとっての課題は、単語量だなと感じました。もっともっと勉強してコミュニケーションが取れると楽しいだろうなと、思いました。ある時、英語で急に話しかけられて英語で返事をした自分に驚き、日本で英語を学ぶ何倍も成長を感じられました。ホストファミリーも会話に単語で説明をしてくれたり、言い方をかえてくれたり、勉強になるように会話をしてくれていることを感じました。優しさで胸が熱くなり、ありがたいと思いました。
また、外国のＩＴ事情を見ることが、僕のもう一つの目標だったのですが、運よくホストファザーの仕事が、ＩＴエンジニアでした。
ニュージーランドの大手スーパーの配達システムを作っていると話をしてくれました。とても興味のある内容で、聞いていて楽しかったです。
ビジネス英語の会話はとても難しく、内容を理解することは難しかったですが、日本もニュージーランドもどんどんＩＴ技術を取り入れる社会に発展していっているなと感じました。

今後の未来は、必ず情報が役に立つと思います。僕は絶対にこの経験を活かし、歩んでいきたいと思います。

ホストファミリーと夕食

忘れられない ニュージーランドでの日々

浜の宮中学校　　高島　莉愛奈
1年

私が中学生海外派遣事業の募集があると知ったきっかけは母でした。母が加古川市の広報を見て「ホームステイだってー！！してみない？」と聞かれたのがきっかけでした。派遣内定の知らせをきいたときは、嬉しさと同時に派遣生みんなと仲良くできるのかどうか心配になってきました。しかも私は人見知りなのでさらに心配になりました。研修を通して、みんなと仲良くできたので、このメンバーとなら大丈夫という安心感と私の中ではみんなとの絆も生まれてきました。

出発の日。バスの中ではニュージーランドに行く実感がなく、なんだか遠足に行くみたいでした。しかし、成田空港からオークランド空港に向かう飛行機に乗ると少し実感が湧いてきました。飛行機を降りたら冷たい空気が肌にあたったのがすごく印象的でした。この時私は、１０日間がんばろうという気持ちになりました。

私のホストシスター

いよいよホストファミリーと対面。迎えに来てくれたのが一番最後だったので、みんなはどんどん行ってしまうのに私は取り残されている。もしかして忘れられている…？と一気に不安になりました。けれど、ホストマザーがものすごくハイテンションで迎えに来てくれて一安心しました。そして次の不安がやってきました。それは、自分の英語が伝わるのかということです。しかし、ホストファミリーは私の不安を読んだかのようにゆっくり話してくれました。

私のホームステイで一番楽しかったのは、ボードゲームと巨大なジェンガをホストファザーと、私と同室の派遣生のさくらちゃんとしたことです。最初、ボードゲームのルールを教えてもらったのですが、あまり言っていることがピンとこず分からない顔をしていると、丁寧に指をさしながらルールを説明してくれました。このボードゲームはとても楽しかったです。

ホームステイ後半になると何だかこの場所から離れたくない気持ちが出てきました。でも、さようならの時が来てしまいました。毎日毎日送ってもらった学校に行く道が最終日には短く感じました。さようならの時、ホストシスターは泣していました。するとマザーは「彼女はさようならが嫌い。彼女はまた会いましょうが好き。」と言いました。私はこの言葉に感動し、何度も何度も「シーユーアゲイン！」と告げました。とても良かったホームステイでした。

学校の授業体験

オークランド博物館見学。私の心に残ったのはハカです。ハカはマオリ族が戦いの前にする儀式で、時々目を見開いたり舌を出したりするのは威嚇で、全ての行動に意味があると初めて知りました。迫力がすごすぎたので鳥肌がたちました。

次にスカイタワーを見学し、展望台からの景色は絶景でした。下がガラス張りで下の景色も見える場所があり、そこに立って下をのぞいてみると、今にも落ちそうで私はとても怖かったです。ＶＲゴーグルをつけてスカイタワーの外をジェットコースターのように一周するというアトラクションがあり、派遣生のみんながしていたので私も挑戦しました。私は大絶叫でＶＲゴーグルをはずすとたくさんの人に見られていたことを知り、少し恥ずかしいような、でも楽しかったです。

帰国前夜、リーダーの部屋に集まりました。私にとって思い出の味となったＬ＆Ｐをみんなで飲み、お菓子を食べました。みんなの思いは同じで「日本帰りたくないな～」と話していました。

いよいよ帰国の日。行きの空港ではワクワクの気持ちでしたが、帰りの空港では何だかさみしかったです。滞在中お世話になったガイドの大木さんと別れの時がやってきました。大木さんは「さようなら」ではなく「行ってらっしゃい」と言いました。また来てほしいから「行ってらっしゃい」と言うそうです。その言葉に感動し、私は全力で「行ってきます！」と伝えました。本当にいつかまた来たいです。

日本に到着。飛行機から出て、第一声が「着っ！！」でした。楽しかった日々が終わった感じがして悲しかったです。それだけ楽しかったなと思うと、この１０日間は忘れられません。

ボードゲーム中

私が過ごした夢のような10日間

平岡中学校　　塚本　さくら
3年

ニュージーランドで過ごした10日間は毎日とても充実していました。

ニュージーランドに着いて１日目、市内観光をした後にワイタケレスクールに行き、そこでホストファミリーと初めて会いました。私は最後にお迎えが来たので、派遣団のメンバーがいなくなる度に不安を感じていました。しかし、ホストマザーがすごくハイテンションで挨拶してくれたので、一瞬で不安が消えました。車の中でホストシスターに話しかけようとしたとき、英語が通じるか急に不安になり何度もやめようかと思いました。心配とは裏腹にホストシスターは私の英語を聞き取ってくれて安心しました。家に着いた後はホストシスターやブラザーと遊んだり、ホストマザーと話したり、楽しい時間を過ごしました。初日から色々と話ができたのでその後も話しかけやすくなりました。ホストファミリーは毎日夕食のとき「今日、一番印象に残っているのはどんな出来事？」と聞いてくれました。一度、「この夕食の時間が一番好き。ラム肉がすごくおいしい」と言うとホストファミリーはとても喜んでいました。ホストファミリーが出してくれたご飯は全部とても美味しくて、毎日ご飯の時間が楽しみでした。

学校でのランチタイム

私と同室の派遣生の莉愛奈ちゃんが日本食を作ったとき、ホストファミリーが美味しいと褒めてくれました。おにぎりのレシピとヨークシャー・プディングのレシピを教え合うこともできました。お互いの食文化を交換できて嬉しかったです。

２日間、学校訪問があり初日にハカを披露してもらいました。ハカはとても迫力があり、ホールに入った瞬間に振動が伝わってきて驚きました。その後バディを紹介され、バディに学校を案内してもらったり、授業を体験したりしました。バディに名前を聞かれ、答えるとバディが「グッド」とほめてくれたのが印象に残っています。その後もバディは事あるごとに褒めてくれました。ニュージーランドでは色々な人が頻繁に褒めてくれました。日本では、何か特別なことがないと褒めることはないけれど、ニュージーランドではどんなに小さなことでも褒めてくれる人が多かったです。私は日本にいた時、頻繁に人を褒めるように意識していましたが、ニュージーランドに行くと皆もっとよく褒めていると感じました。これはニュージーランドに行って私が見習いたいと思った出来事のひとつです。

バディとの２ショット

私がニュージーランドで一番大変だったのはバディの英語を聞き取る事でした。ホストファミリーはゆっくりと話してくれるのですが、バディは話すのが早くて聞き取れないことが多かったです。簡単な言葉で言ってもらったり、ジェスチャーで伝えてもらったりして解決していました。私が聞き取れなくて何度も聞き直しても誰も怒りませんでした。学校訪問２日目にはバディの英語も聞き取れるようになり、ゲームをして仲良くなることができて嬉しかったです。

この研修でニュージーランドの多文化共生について色々と考えていましたが、決定的な出来事はありませんでした。それぐらい様々な文化が当たり前のように共存していました。様々な国の人がいるので自分が外国人という実感もあまり湧きませんでした。学校でも、町でもどこに行っても皆が優しく話しかけてくれました。英語を上手に話すことができなくても誰も気にしませんでした。私がうまく発音できず、単語が伝わらなくてネットで発音を調べながらホストマザーに「ソーリー」というとホストマザーが「通じなくても諦めずに、挑戦し続けて」と言ってくれました。挑戦することを大切にしているから、挑戦している人に対して冷たくしたり、よそよそしくしたりしないのかもしれないと考えました。その様な姿勢は私が率先して取りいれ、日本でも広めていきたいと思いました。

今回、ニュージーランドに観光ではなく研修として行くことでできた特別な体験もあると思います。この研修に参加することができて本当に良かったです。

ホストファミリーとの記念写真

国を越えてわかった人間の本質

両荘中学校　　徳田　瑛斗
3年

私はこの体験を通してたくさんのことを学ぶことができました。私は主に２つのことを学びました。１つは言語と人間について、もう一つは人との接し方についてです。どちらにしても人間の本質を学ぶことができました。

１つ目の言語については、私は最初全く英語を話すことができませんでした。なので、ホストファミリーの会話や学校訪問でのバディとの会話などがスムーズにできませんでした。そのため、言葉ではなく「感情」で意思疎通を行いました。そうするうちに、人種や国境を越えても感情は同じであることに改めて気づきました。

私はワイタケレスクールの授業で体育をしました。現地の子供たちとバスケットボールやサッカーをしました。私は英語が自然に話せなかったので、喜ぶ、悔しがるという感情でコミュニケーションをとりました。そうして私はある答えにたどりつきました。それは「言葉は、人間が助け合いをするためにできた」ということです。人間が協力しあって生活をするようになった時代、自分の状態や遠くの出来事を伝える手段として開発された「言葉」を使うことで活発に人と人との交流ができるようになったと、私は考えます。人間はその言葉や文化が生まれた場所が違っただけで、感情という共通言語は変わらないのです。私たちは「言葉の壁」という言葉を使います。言葉が通じないと相手の感情は全くわからないので、言葉が違えば全く別の人間だと思うことも理解できます。ただ、人種や言葉が違っても、人間であることは変わりません。国が違っても同じ人間だと思って接すれば、どこの国の人も親切に迎えいれてくれます。私はこれからそういうふうに、どこの国の人でも接しようと思います。

学校でのスポーツ交流

２つ目の人との接し方についてです。私はニュージーランドに行ったとき、何か空気感が違うと感じました。その違和感は人と接するうちになくなっていきました。ニュージーランドでは日本と違い、スーパーマーケットなどで人と接するときに気軽に声をかけて会話をしています。ニュージーランドでは人との距離がとても近くにあり、初対面の人も行きつけのレストランの人にも親しく会話をしてくれました。ワイタケレスクールでは学校の先生と生徒の会話でも上下関係を感じさせないほど親しく会話をしていました。そんな時、日本語と英語の大きな違いを見つけました。それは「英語には敬語という概念があまりないこと」です。日本語で「これはペンです」と言っても「これはペンだ」と言っても、英語に翻訳すると同じ文になります。英語にも丁寧な表現はあるようですが、人との接し方の違いが、敬語という概念の違いにつながっているように感じました。

ホストファミリーと食事

日本には「謙虚」や「親しい仲にも礼儀あり」という言葉があるほど、人間同士の適度な距離感を大切にしてきました。日本は江戸時代の幕藩政治のように上下関係がはっきりと分かれていたころ、上下関係を言葉でも表す必要が出てきたことで、敬語が生まれたのではないかと私は考えています。これから日本でも、上下関係の概念が薄れてきた場合、もしかしたら敬語の使い方が変わるかもしれません。

この研修では、日本では学べないことをたくさん学ぶことが出来ました。そして、多くの日本人は「型」に縛られてきたのではないかと感じました。「上の位の人が偉い」、「男は仕事、女は家事をする」などといった昔からの考え方や価値観は、長い年月をかけて形成されてきたと思います。これまで当たり前だったことが、今、大きな転換点にあります。実際、ニュージーランドでは上下関係はあまり感じませんでしたし、男の人が家事をすることが当たり前になっていると感じました。これからの時代、それぞれの文化や価値観を大切にしつつ、変えなければならない「型」を改めていく必要があると思います。私は今の常識を新常識に変えていけるひとりになれるよう、型にとらわれず、たくさん行動を起こしていきたいです。

お世話になったドライバーさんにあいさつ

未来へ向けて 新しいスタート

中部中学校　長野　心菌
3年

私はこの海外派遣でたくさんのことを学び、感じました。ニュージーランドで１０日間過ごして、大きく心に残ったことが4つあります。

１つ目は、ホームステイです。４人の幼い子供たちに受け入れてもらえるかどうか行く前はとても心配でした。会ってみると、6歳のエミリーはすぐに抱きついてきてくれましたが、一番下の３歳のリアムはとても恥ずかしがりで顔もあわせてくれない状態。ホストファミリーが私たちの名前をリアムに言わせようとしましたが、「コ…コ……ノー！！」と言って顔をそむけてしまう状態だったので、このまま仲良くなれなかったらと思りました。しかしホストマザーが「すぐに放っておいてくれなくなるよ」と笑いながら言った通り、次の日は名前を呼んでくれ、その次の日には急激に仲良くなって「ベストフレンド」だと言ってもらえ沢山一緒に遊びました。他のホストファミリーとも仲良くなり、お別れの時に泣いてしまうくらいに楽しく、有意義な時間を共に過ごすことができました。

ホストシスター達

２つ目は、学校訪問です。日本と異なるところが多く、日本と比べて授業はとても自由で、生徒それぞれが主体となり勉強していました。「それぞれ勉強の進み具合が違うから、自分のやるべきことをやってね」という雰囲気です。特にスピーチの時間が印象的でした。テーマは「好きなものについて調べる」。クラスメイトたちはみんな堂々とスピーチし、自分が好きなものに誇りを持っていました。発表者に感想を伝える時間では、どんなに細かいことでも必ず５人ぐらいが手を上げて良かったところを伝えていました。自分が好きなものに誇りを持つ事や、人が好きなものを否定せず認める事は、見習うべきところだと思います。たくさんの気づきと学びがあった２日間となりました。

３つ目は、ニュージーランド人の優しさと人柄です。店で物を買えば店員さんが話しかけてくれたり、質問に笑顔で答えてくれたりすることがあり、コミュニケーションの多さに、気さくで優しい人が多いと感じました。また私の学校のバディのシャーナはお別れの時に、一生懸命に日本語で書いた手紙をくれました。とても感動し、これがシャーナの優しさと日本を理解しようとする気持ちではないかと思いました。

お世話になったホストファミリー

４つ目は、ニュージーランドの大自然です。街には美しい自然が残されており、街から離れれば息をのむような自然が３６０度見渡せます。こんなに美しい自然が残っていることが衝撃的で、日本にも増えてほしいと思いました。

ニュージーランドで異文化交流したことで、多文化共生がとても重要だと感じました。今後、多文化共生に貢献し、自分自身も成長する為にやっていきたいことができました。それは、お世話になったホストファミリーや学校のバディとのつながりを持ち続け、異文化交流を続けることです。

また、もっと色々な国へ訪れて新たな海外の友達との関係も築いていきたいと思います。その為には、ニュージーランドで学んだ英語を忘れないようにさらに伸ばしていく必要があります。英語だけでなく、他の国の言語も学んでみたいです。様々な言語を理解できれば、国際的なコミュニケーション・多文化共生に役立つと考えるからです。そして、加古川市の国際交流の行事に積極的に参加し、色々な国の文化や価値観を知り、加古川市に住んでいる外国人の方の為に何か役に立てることをしてみたいです。

最後に、この旅のおかげで素晴らしい派遣団員のみんなと出会え、交友関係を築くことができたことは一生の宝物です。皆さんが私に与えてくださったニュージーランドの貴重な体験をもとに、多文化・多様性が認められる社会を築く為に、自分に何ができるのか考え、行動する為に新しいスタートを切りたいと思います。

仲良くなったバディのシャーナ

一生の宝物

平岡南中学校　　西澤　こはる
2年

大人になったらこのメンバー全員でまた来たい。最後の夜、私は帰国するのが寂しくて、ずっとずっとみんなと一緒にここにいたくて、そんな風に思っていました。私にとって、この１０日間はそれほど素晴らしく充実した日々でした。

数回の事前研修を終え、メンバーとも少しずつ仲良くなってきた頃、ニュージーランドに旅立つ時が来ました。オークランド国際空港に降り立つと何もかもが英語で、外国に来たことを実感しました。ホームステイ先や現地の学校で受け入れてもらえるか、ちゃんと話せるか不安でいっぱいでしたが、それ以上にこれから始まることにとてもワクワクしたのを覚えています。

ホストファミリーの車で自宅に向かう途中はとても緊張していました。しかし、自宅に着くとホストブラザーのデズモンドが自分のおもちゃの銃を私に渡して「自分たちはチームだ。グースベイダーを倒そう」と言ってくれ、一緒にスターウォーズごっこをしました。ホストシスターのマチルダは９歳ですが大人っぽくて、私たちに色々話しかけてくれました。そこから一気に緊張が解けた気がします。

翌日は学校訪問でした。私のバディはザラで同い年の女の子でした。ザラとは好きなスポーツや趣味の話をしました。私の英語を一生懸命理解しようとしてくれて嬉しかったです。学校には色々な国籍の子がいて、たくさんの言語が飛び交っていました。国籍や肌の色、文化が違っても何の違和感もなく笑いあっていてとても素敵でした。さらにマオリ語の授業があったり、マオリ族の踊り「ハカ」を踊ったりし、伝統的な文化を尊重し共生していました。私にとってこの体験は、多文化を尊重し受け入れるということを肌で感じた出来事でした。

親戚のパーティーで

ニュージーランドで驚いたことはパーティーと食事の量が多いことです。他のホストファミリーと合同でピザパーティーをしましたが、大人数でも食べきれない量でした。日本にいると朝昼夜と３食ですが、ここではおやつタイムが何度かあり食事と食事の間が短いです。食べることが大好きな私はとても幸せでした。ホストファミリーデイの日にもパーティーがありました。そこではホストファミリーの親戚一同が集まり、全員で３０人ぐらいいたのではないかと思います。みんながすごく親切で優しくてグランドマザーは私を抱きしめ、頬にキスをしてくれました。寝る前にはデズモンドが「こはる、グッナイ」といってお腹に抱きついてきてくれて、とても嬉しくて幸せでした。私はこの日、もっとこの国が好きになりました。

タウンホールであいさつ

ホビット村、スカイタワー、博物館、そして、ホテルの一室にみんなで集まってパーティーしたことなど、たくさんの思い出ができました。

伝えたい気持ちがあれば、言葉の壁は思っているより低いこと。不安や心配を解消してもらえれば、その国と人がもっと大好きになること。誰かが大切にしている伝統や文化は、尊重してあたりまえなこと。

ニュージーランドで学んだことは、まだまだ書ききれないほどたくさんあります。この素晴らしい経験を今できたことは私の一生の宝です。これから同世代の人、年上年下の人に伝えていける時間がたくさんあるからです。外国との往来もコロナ前のように戻りつつあり、今後はたくさんの外国の方が加古川にも来てくれると思います。日本に、そして加古川にも素晴らしいところがたくさんあり、自分の大好きなこの街と人を外国の方にも好きになってもらいたい。そして、多文化共生のお手本であるニュージーランドに近づけるよう、私も恐れずにコミュニケーションをとり、自分にできることをしていきます。

最後に、一生忘れられない経験を共にしてくれた９人の仲間に感謝の気持ちを示したいです。このメンバーで本当によかったです。みんなのことが大好きです。

アート授業体験

私の挑戦

東洋大学附属姫路中学校　　野神　真愛
3年

私がこの事業を知ったのは中学３年でした。新しいことに挑戦してみたいという気持ちで応募しました。研修に参加していくうちに段々と実感が湧いてきました。初めての海外、飛行機、親がいない旅行というような状況でしたが、不思議と不安にはならず、「なんとかなる」と思っていました。それは、友達や引率の先生方の影響が大きかったのだと思います。

長時間かけて着いたニュージーランドは私の想像以上で「ここでは、『外国人』という立場に私はなった」ということに気づいたのは空港を出てからでした。日本語は目からも耳からも入ってこず、すれ違う人はヨーロッパ系の人、アジア系の人など様々な国の方々でした。標識や車のナンバーは日本とは違って、どういう意味なんだろうと気になりました。初日のお昼ご飯は各自で食べるというスタイルだったので、初めて英語で注文することになりました。私のつたない英語も聞き取ってくださり、自分がほしかったものを食べることができました。達成感がじわじわと湧いてきて、その店員さんにおすすめのデザートについてたずねることもできました。

学校でパティとランチ

ホストファミリーとの生活はとても楽しかったです。最初、緊張して話すことができなかった私に、分かりやすいようにゆっくり話してくださいました。学校はアメリカ英語だったので、イギリスの英語の発音には慣れていませんでした。徐々に慣れてはきましたが、単語の意味が分からなかったり、自分の意見をそのまま完璧なニュアンスで伝えることができませんでした。今考えてみると、言葉が通じないのによく生活できたなと思います。ホストシスターはやんちゃで、トランポリンの上に犬を乗せてジャンプしたり、かくれんぼをしているはずなのに家に帰ったりする自由さがありました。日本の家には大きいトランポリンはなく、ましてや犬を乗せてジャンプをするなんて考えられません。日本では考えられないことをたくさんしました。

ホストファミリーへの日本の文化紹介で「戦争について」と私が調べている「日本の伝統的な家の造り」を紹介しました。どちらも真剣に答えてくださり、必ず「あなたはどう思うの？」と聞いてくださいました。一方的に自分の意見を相手に伝えるのではなく、自分の意見を述べてから相手の意見を聞き、尊重してくださいました。

ホストファミリーとの対面

「あなたは私たちの家族ではないから」という雰囲気はなく、むしろ「家族だから当たり前でしょ」という感じで接してくださいました。そのおかげで、言葉は通じないし、文化も違う私を優しく受け入れてくださいました。

この研修で「平和とはなにか」という学校の課題についても考えようと思っていました。私は「平和」を「お互いを理解、尊重、認めることができる世の中」と定義します。それはホストファミリーや学校のバディなど、ニュージーランドで出会ったすべての人から学んだことです。自分たちとは違うからと差別することはなく、ありのままの私を受け入れてくださいました。そのような世の中になるためには、この事業のような国際交流や留学などを通して、外国ともつながりを持つということが大切だということに気づきました。

自分の視野を広げることができるだけでなく、「友達があの国にいるから戦争をしてほしくない」と思うことで、戦争がなくなっていくきっかけになるのではないかなと思います。

ニュージーランドで過ごした１０日間はあっという間で、帰国日が近づくにつれ、「帰りたくない」という気持ちが強くなっていきました。いつもと変わらない夏休みを過ごすはずだと思っていた私にとって、このような貴重な経験となりました。

交流時間のカードゲーム

最高の10日間

白陵中学校　　原　楠季
2年

待ちに待った出発の日、たくさんの人に見送られて希望と少しの不安を感じながら日本を出ました。私にとって初めての海外となる、ニュージーランドはどんなところなのかと期待を膨らませながら空港の外に出ると、まず、日本では味わえないような心地よく冷たい空気に驚きを感じました。そして英語があちこちから聞こえてきて、自分が「外国人」になったことに新鮮さを感じましたが「海外にやってきた」という実感があまりなく、１０日間ずっと不思議な感覚でした。

ニュージーランドで体験した何もかもが素晴らしいものでしたが、特に心に残ったことが３つあります。

１つ目はホームステイです。不安に思いながらも、楽しみに待っていたホストファミリーとの対面はとても緊張しました。しかし、ホストマザーもファザーも笑顔で迎えてくれたうえ、握手で挨拶をしてくれて親近感がわきました。最初は、ホストファミリーの英語が速くて、日本で習っている英語と全然違うと感じてしまうほど聞き取れず、これからホストファミリーと過ごしていけるのかという不安や、自分の英語力の低さに悔しくなり、自信もなくなっていきました。次第に、速い英語に耳が慣れていって、何と言っているのかが分かってくるようになったときは、とても嬉しかったです。ホストシスターとは、英語が上手く通じなくても、友達のように仲良くなれて、外国人が相手でも、相手のことを分かろうとする気持ちがあればコミュニケーションをとることができることに気づきました。ニュージーランドの家の多くは、庭が家の何倍もの広さがあるので、とてもものびのびとした暮らしをしていたり、街のあらゆるところで緑が守られていたりしていて、日本も、もっと自然と人が一体となれるような国になったらいいなと思いました。

絵本を通じて交流

２つ目は学校訪問です。学校訪問の中で印象に残っているのは、多くの生徒や先生が、私のような、見知らぬ外国人にもクラスメイトのように気さくに話しかけてくれたり、助けてくれたりしたことです。フレンドリーな人が多く、髪や目の色、性別を問わず仲が良くて、私たち日本人がいることに、特別感を抱いている様子でもありませんでした。私は自然に学校に溶け込むことができたので、外国人を外国人だと意識しない考え方は、ニュージーランドに来た人が過ごしやすく、素敵だと思いました。またバディに、あるゲームのルールを説明をした時に、自分の最大限の英語の知識やジェスチャー、実演でなんとかルールを教えられた時はとても嬉しかったです。英語が伝わらないからと、すぐに諦めないで一生懸命に英語でコミュニケーションをとることの大切さを感じました。

日本庭園であいさつ

３つ目はマオリの文化です。学校とオークランド博物館でハカを見させてもらいました。どちらもとても迫力がありました。一人一人が自分たちの文化に誇りを持っていて、その伝統や習慣をこれからも残していこうという強い意志が伝わりました。私も、日本という国の文化や伝統を堂々と世界に広められるように、自分自身も、日本についてさらに知ろうと思いました。そして、ニュージーランドの人たちは、どんな人とでも、些細なことでも「ありがとう」をたくさん言いあっていて、私も「ありがとう」と言われたら、気持ちが良くなったので日本でも、挨拶や「ありがとう」をたくさん言おうと思いました。更に、見知らぬ人とでも目が合えば、にこっと笑ってくれるのも、素敵な習慣だと思いました。また、ニュージーランドで過ごした中で、工夫してコミュニケーションをとろうとすることで、何事にもチャレンジすることの大切さを学びました。

これから、この経験を活かして、どんな人たちとでも、相手の考えや意見、文化などを否定せずにしっかりと受け止めて、分かろうとすることを心がけていこうと思います。

ホストファミリーと

国境を越えた絆

神吉中学校教諭　　清水　優也

今回、加古川市中学生海外派遣団に引率教師として同行させていただきました。以前オーストラリアにワーキングホリデーで訪れた経験はあったのですが、ニュージーランドへ行くのは初めてで、久しぶりの海外ということもあり、私も緊張したまま日本を後にしました。派遣生のほとんどが海外へ行った経験がないとのことで、出発前は不安と緊張で複雑な表情でしたが、現地でのさまざまなプログラムやホストファミリーとの関わり合いの中で、次第に異国文化を楽しんでいる様子でした。

初日のオークランド市内見学では、コマーシャルベイというお店で自ら英語で昼食を注文しました。英語が全て聞き取れない悔しさを感じながらも、習ってきた英語を使って無事に注文ができたことから、英語が伝わる喜びや間違いを恐れず頑張れば伝わるということを知ることができ、ニュージーランドの旅のいいスタートをきることができました。私自身も、最初の留学では自分が伝えたいことをどう表現すればいいのかわからず不安になったり、現地の人の流暢な英語が聞き取れず苦労したりしたことを思い出しました。また、現地の学校訪問と授業体験は、派遣生にとって大きな経験になっていると思います。

学校での歓迎セレモニー

はじめにニュージーランド伝統の歓迎として子どもたちがハカを踊って私たちを迎えいれてくれました。テレビで見たものとは違い、生で見るハカはとても厳かな雰囲気であると同時に、神聖さが伝わる素晴らしい演技で、見ているだけで圧倒されました。派遣生たちも練習した日本の伝統ソーラン節を踊りました。自分たちの文化を披露し、自然と拍手がなる姿を見て、互いの文化を尊重し、たとえ言葉を全て理解できなくても、心が通じあえた気がして胸が熱くなりました。国際理解に必要なのは言語ではなく、わかりあおうとする心であることを実感した瞬間でした。

授業体験ではオールイングリッシュで展開され、内容を理解することが難しかったのですが、それまでに培った「諦めずに挑戦すること」「失敗を恥ずかしいと思わないこと」を生かし、周りの先生や生徒同士で助け合いながら、一生懸命に授業に参加していました。その後訪れた市役所や日本庭園では、たくさんの人がもてなしてくれ、

オークランドのタウンホール訪問

日本とニュージーランドの絆の強さを感じました。特に日本庭園では多くの人が出てきて、私たちに日本語で自己紹介をしてくれたり、派遣生に対してたくさん質問をしてくれたりし、ニュージーランドの方々の心の温かさや日本への深い愛情を感じました。このような経験ができたのは、今までこの交流を通して関わってきてくださった方々をはじめ、昔から日本という国や日本人が、国境を越えて互いに理解し合い、絆を深め合ってきたからであることに改めて気づかされました。

この研修を通じ、ニュージーランドの風土や文化、食事を体験できただけでなく、相手を思いやる心は万国共通だということを知ることができました。子どもたちにとっても、家族と離れ、一人異国の地で日本語も通じない生活は慣れなかったでしょうが、このプログラムで得られた経験はきっと一生ものだと思います。また、私自身も英語に囲まれた生活、そして目の前の課題に果敢に挑む子どもたちのエネルギッシュな姿にとても刺激を受けました。ニュージーランドの人々が私たちに与えてくれた温かさを持って、帰国してから周りの方々、生徒たちに還元したいと思います。

今後もこの派遣事業が未来の子どもたちにも続いていきますよう願っております。この度は貴重な経験をさせていただき、誠にありがとうございました。

学校での授業風景

青年海外派遣

次代を担う若者を姉妹都市「ブラジル・マリンガ市」に派遣し、現地での交流を通じて外国人への理解を深めて国際的視野を持ち、国際協力、国際親善に貢献できる人を育成することを目的とした、第２９回加古川市青年海外派遣事業を実施しました。

研修概要　（事前研修～派遣研修～報告会）

（1）派遣生

８名
岡田　真悠子、瀬　まひろ、坪本　茜音、高塚　凛、谷　星那、成瀬　琉真、前川　圭太郎、芳本　恒佳

（2）団長、引率

川西　三良(国際交流協会副理事長・副市長)、岸本　俊信

（3）事前研修

８名の派遣生は、訪問先の文化や歴史、習慣などを学ぶことで、日本と違うところを発見して、相手を理解し、認めることの大切さを学びました。また、歴米を中心に多くの移住者を送り出した、神戸市立海外移住と文化の交流センターを訪問し、過去から現在へとつながる海外移住の歴史と意義を学びました。そして、帰国後に自分自身ができる国際貢献は何かということを考える機会も持ちました。

７月　１日	オリエンテーション、先輩の体験談
７月　８日	ポルトガル語研修、訪問地研究発表
７月２９日	海外移住と文化の交流センター見学、自己研修テーマ発表

（4）結団式

８月５日に青年海外派遣と中学生海外派遣の合同で開催。市長や市議会議長、教育長から激励の言葉をいただき、派遣生代表が意気込みを力強く宣誓しました。
国際ソロプチミスト加古川から現地で使用する記念品をいただき、加古川ライオンズクラブからマリンガ市に寄贈する日本語学習図書を預かりました。

（5）派遣研修

月　日	場　所	内　容
８月　９日	加古川～伊丹空港 ～成田国際空港	
８月１０日	ドバイ～サンパウロ ～マリンガ	
８月１１日	マリンガ	サンフランシスコ・ザビエル学校訪問 マリンガ市役所、市議会表敬訪問 マリンガ日本庭園見学 マリンガ市役所主催歓迎昼食会
８月１２日	マリンガ	加古川マリンガ外国語センター 設立３０周年記念式典 ホストファミリープログラム
８月１３日	マリンガ	ホストファミリープログラム お別れ夕食会
８月１４日	マリンガ イグアス	イグアスの滝（ブラジル側）見学
８月１５日	イグアス リオデジャネイロ	イグアスの滝（アルゼンチン側）見学
８月１６日	リオデジャネイロ	コルコバードの丘、砂糖パンの丘等見学
８月１７日	リオデジャネイロ ドバイ	
８月１８日	ドバイ	ジュメイラモスク ブルジュ・ハリファ等見学
８月１９日	ドバイ～関西国際空港 ～加古川	

（6）事後研修

９月２日に開催。現地での経験を今後どのように生かせるかなど意見交換を行い、自分自身ができる身近な国際協力や国際親善を考える機会も持ちました。また、報告会の発表内容をグループ別に検討し、以後、自主的に集まり報告会の発表準備をしました。

（7）報告会

１１月１９日に青年海外派遣と中学生海外派遣の合同で開催。それぞれのグループ別に発表し、発表後、中学生と青年、国際交流協会役員で座談会を行い、海外派遣で感じたこと、経験を通じて自分ができる活躍の場などについて意見交換をしました。

派遣研修 11 日間の記録

8月11日
学校訪問

8月11日
日本庭園

8月14日
ホストファミリーとのお別れ

8月14日
イグアスの滝

8月11日
学校訪問

8月17日
マリンガ市役所

8月16日
コパカバーナ海岸

8月18日
プルジュ・パリファ

ブラジル派遣を通して

岡田　真悠子

今回、私が青年海外派遣事業に参加した直接的なきっかけは、親から勧められたことでしたが、私自身、将来は海外で働きたいと思っていたので、自分自身の国際理解を深め、視野を広げるためにも参加したいと思い、参加を決意しました。

一人でこのような長期間のプログラムに参加するのは初めてだったため、出発前は少し不安でした。しかし、長時間のフライトを終え、マリンガ空港に到着すると、深夜にもかかわらず多くの現地の方々がわざわざ出迎えに来てくださっており、感じていた不安も吹き飛びました。滞在期間中は、毎日がとにかく新しく、濃密でした。加古川へ帰り着いた時には、少し疲れもありましたが、何とも言えない充実感が得られました。

ホストファミリーとバーベキュー

◆マリンガ市

まず初めにサンフランシスコ・ザビエル学校を訪問しました。到着すると全生徒が両国の国旗を振って出迎えてくれ、私を驚きと感動に包んでくれました。ブラジルは、その開拓の歴史から、いろいろな国にルーツを持つ人々が集まっています。学校の生徒も、外国からの来客や、異なる言語を話す人に接することに慣れているのかもしれません。滞在日数に余裕があれば、生徒たちともっとゆっくりと触れ合いたかったです。

その後のマリンガ市役所への表敬訪問はかなり緊張しました。副市長をはじめとする市役所の方々が私たちのために時間を割いてくれました。日本や加古川市にとても親近感を持ってくださっており、マリンガ市と加古川市の友好関係の深さを感じることができました。高校生では体験できない、貴重な機会だったと思いました。

◆ホストファミリーと

私が最もこの派遣で記憶に残っているのはホストファミリープログラムです。私は加古川観光大使でもある元Ｊリーガーの三都主アレサンドロさんの家にホームステイをさせていただきました。私以外にも、サッカー留学の男の子と女の子が一人ずついて家はとてもにぎやかでした。私が考えていたホストファミリーとうまくやれるかなどの不安はその温かい雰囲気ですぐになくなりました。

親戚の集まりにて

１日目は午後からのスタートで、日本文化を紹介する日本文化祭という大きなイベントへ連れて行ってもらいました。そこでアイスの天ぷらを食べたり、書道を見学したりしました。日本人よりも日本の事を知っている人も多く、自分の無知さを痛感しました。しかしそれとともにもっと日本の事を知ることも国際交流になるのだということを身をもって体験しました。日本との時差が１２時間もあるため、滞在中は朝５時台に目が覚めることが多く、なかなか大変でした。

最終日の３日目は、朝早く起き、親戚の方々との集まりに持っていくためにピーナッツケーキとキャロットケーキをホストマザーと一緒に作りました。午後には、親戚やサッカー留学の子供たちとバーベキューをしたり、犬と遊んで過ごしました。車に乗って移動しているだけでも日本と全く違う風景が広がっていて本当に新鮮でした。

ブラジルでは、朝市やホームパーティなどで、友人や近所の人とゆっくり時間を過ごす機会がよくあるそうです。近所の人たちとの関係が希薄化していると言われる日本社会と比べると、とても良い文化だと思いました。短い滞在ではありましたが、あっという間の楽しいひと時で、翌朝、ホストファミリーとお別れする時には、思わず泣いてしまいました。

バスに乗り込んでからは、他の研修生がホストファミリーと何をしていたかなどを語り合いました。たった３日間のホストファミリープログラムではありましたが、一生忘れない思い出になりました。自分自身の人生経験の大きな場所を占めると思っています。

◆最後に

ブラジルでは、初対面であるにも関わらず、多くの方々から行く先々で本当に温かく接していただきました。１１５年前の日本人移住の歴史と、マリンガ市と加古川市との５０年間の交流があるからこそだと思います。私もこのマリンガ市と加古川市との友好交流をさらに拡げ、未来の世代へつなげていく役割の一端が担うことができればと派遣研修を終えてそう感じました。

そして国際交流として、まずは日本の事を知るということから始めてみようと思いました。

地球の反対側の景色は

瀬　まひろ

「海外に行くと人生が変わる」この言葉を中学生の時に聞いた時からずっと海外に行ってみたいと思っていました。海外に行ったことのある人たちはどんな世界を見ているのか、どう感じているのか、海外で何を見て何を学んだのか、それがとても気になっていました。そんな時、青年海外派遣団のチラシを見て、これは行くしかないと、海外、しかもブラジルに行けるなんてまたとないチャンスだと思い、応募したのがきっかけでした。

ブラジルで一番驚いたことは、人と人との距離の近さです。例えば挨拶だと日本では、お辞儀をするのが一般的な挨拶ですが、ブラジルの方々はハグをしてから頬にキスと、とにかく距離が近くとても驚きました。初対面の方にもそうするそうで、すぐに打ち解けられるとホストファミリーが教えてくれました。確かに日本ではスキンシップが少なく、距離が遠いように感じます。本当に地球の反対側に来たのだということを飛行機の時間の長さだけでなく、こんなところでも感じました。

学校訪問

また、マリンガ市で開催されていた「ジャパン・フェスティバル」で私はホストファミリーと食事をしていたのですが、約束をしているわけではないのに、友人や親戚、祖父母にまでそこで会ったのです。みんな気さくに話していて、とても仲が良さそうでした。友人や知り合いが多く、人との繋がりを大切にしているのがすごく伝わってくる出来事で、世界の広さと狭さを同時に感じました。人と人との関わり方一つにも、日本とこれほどの違いがあるのだと驚愕しました。このように、ブラジルでは距離が近く、多くの友人がいる絆が強い国だと思いました。これまで、ブラジルはサッカーが強いとか、コーヒー豆で有名だとしか知りませんでしたが、人と人とのつながりなど、実際に行ってみないと分からないこともあると学びました。

ホストファミリーと過ごした時間も驚きと発見に溢れた日々でした。ずっとホストファミリーと仲良くなれるのか、受け入れてくれるのか不安で仕方がなかったのですが、最初にマリンガ市の空港で、ホストファミリーの祖母エリザさんがとても優しくお出迎えをしてくださった時、心から安心しました。知らない土地で知らない人にこんなにも歓迎してくれるのかと、なんて温かい人なのだろうと思いました。

ホストファミリー

また、ホストファミリーのお家にも「Welcome MAHIRO！」の文字と、可愛らしいイラストが描かれたポスターがドアに飾ってあり、家中にも風船などの飾り付けをして盛大に迎えてくれました。ホストシスターの友人とパーティーの時も、英語が苦手だと言っていた人もみんな私が会話に入れるよう英語で話してくれて、彼らの優しさをすごく感じました。観光地に連れて行ってくれたり、食べたことのない料理を試させてくれたり、いろんな経験をさせてくれました。魚やアヒルに餌をあげたり、一緒にポップコーンを作ったりしたこともとても大切な思い出です。ホームステイを通して、人の温かさと多くの貴重な経験や思い出など人生において素晴らしく大切なものをもらいました。

イグアスの滝に感動し、新しいものを得られました。そこは信じられないほどの大きな滝で大量の水がものすごい勢いで落ちており、開いた口が塞がりませんでした。緑や自然が光を浴びて美しく茂り、滝の水飛沫を浴びてキラキラと輝いていました。滝は言うまでもなく、その周りの自然さえも雄大で世界遺産たる所以を感じました。滝の近くに行くと水飛沫で服が水浸しになり、耳を貫く轟音が響き渡っていました。美しく、そして迫力があり、多くの生物がそこで暮らしている神秘的な滝でした。日本とはスケールが違う、あまりにも大きい滝で、私が悩んでいたテストの点数など本当に些細なものだと心から思いました。世界は広い、これが私がイグアスの滝で学んだことです。

様々な活動を通して、世界は驚きにあふれていることを学びました。優しさや人との繋がりの大切さに気づき、今まで見たことのないような景色を見ることができました。この経験は確かに私の人生を変えてくれるような大切な経験だと思います。ブラジルでの生活を通して、日本人とは違う価値観や考え方を学べました。世界にはさまざまな価値観を持っている人がたくさんいることを実感し理解しようとすること、そして歩み寄ることを忘れないように外国の方々と接していきたいです。私がしてもらったように優しく接することも大切にし、慣れない土地で不安な方に少しでも安心してもらえるように、とびきり歓迎したいです。

最後に、この派遣活動を通して世界の広さに気づきました。なので私ももう少し自由に生きてみようと思います。

時差12時間の国の魅力
～文化的多様性と多人種の共存～

埠本　茜音

ブラジルは日本とは違い、様々な文化や人種が共存している国です。その秘訣を、私が現地で体験したことや感じたことを交えて内因性（人の内面や特徴）と外因性（国内の環境や風潮）に分けて考察しました。

◆内因性について

ブラジルの人は、年齢や性別、人種の違いで判断しないと感じました。初対面の人ともすぐに仲良くなって、誰に対してもフレンドリーでした。ホストファミリーと出かけた際には、街中で沢山の知り合いの人と会いました。更に、ショッピングモールの店員さんやタクシーの運転手さんともまるで友達のように会話が弾んでいました。ホストファミリーと彼女の友達とピクニックに行く機会がありました。初めは学校の友達だと思っていました。しかし実際は、同じ趣味を持つ人同士の集まりでした。年齢も１８歳から２８歳と幅広く、学生であったり働いていたりと様々でした。私は学校やアルバイト先の同年代の友達ばかりなので、とても驚きました。何よりも、普段の生活では関わらないような人とのコミュニティーも、自分から広げてゆく積極性に感銘を受けました。

ホストシスターと撮ったブラジル式のプリクラ

◆外因性について

ブラジルは、様々な国の食文化が混在していました。それも多文化共生に必要不可欠だと考えます。食というのは、三大欲求にも数えられるほど人間にとっては大切な要素です。食に対して妥協しないことで国民の生活の満足度が高まります。街中にもフードコートにも、ブラジル料理だけではなくタイ料理をはじめベトナム料理、日本料理もありました。私も実際に日本食を食べました。中にはブラジルスタイルの日本食で、インパクトの強いものもありました。鉄板焼きというメニューでは、野菜とお肉の炒め物の上に大量のポテトフライが載っていて、フルーツのお寿司もありました。しかし、刺身やみそ汁などは日本で食べるものと変わりありませんでした。お米も、タイ米ではなく、日本と同じようなお米を使っていたので驚きました。ブラジルで食べたものはどれもとても美味しく、毎日幸せな気持ちでいっぱいでした。もう一つの外因性は、ブラジルの顧客のニーズに合わせるという企業の取り組みです。ブラジルで一番人気のコスメブランドがあるらしく、人気であるのには決定的な理由があると聞きました。実際にそのブランドのHPを見せてもらうと、色のバリエーションの多さに驚きました。ファンデーションは黒色から薄い橙色、リップクリームは真紅や紫色、茶色、黄色まで、本当に沢山の色がありました。人気の理由とは、他のブランドと比べて、ファンデーションやリップクリームの色の圧倒的なバリエーションの多さだったのです。日本では使い勝手が良かったりデザインが良かったりするものが人気です。日本は主に黄色人種ですが、ブラジルでは肌の色は様々です。だからこその企業の戦略が隠されていました。地球の反対側では、消費者の購買志向とそれに付随する企業の商品展開やブランディングまで違うということに驚きました。

顔より大きい生ココナッツのジュース

◆研修で私が感じた事

大きく２つあります。１つ目は人の温かみです。ホストファミリーは、まるで家族のように接してくれました。ホストファミリーの友達と出かけた時も、言葉が分からない私に英語で話しかけようとしたり、私のために沢山のブラジルのお菓子を手作りして持ってきてくれました。初めは言語が通じないことがとても不安でしたが、お互いに歩み寄る気持ちと相手を尊重する気持ちがあれば問題なく意思疎通でき、何事も楽しめるということを体感しました。今回の研修は多くの人の支えがあったからこそ充実したものになったと確信しています。２つ目は、自分の当たり前や普通は通用しないということです。日本の反対側の土地では全てが日本と違っていました。街並みや言語はもちろんですが、考え方や会話の仕方までもが違いました。自分が当たり前や普通だと思っていることは、自分の経験からしか形成されません。自分の中の常識に縛られずに視野を広げて、様々なことを吸収し続けたいと思えるきっかけになりました。

今回短い期間ではありましたが、少なからず自分自身に成長を感じる事ができたと共に、これからも成長し続けたいという活力が得られました。それだけ、ブラジルは魅力とバイタリティーに溢れた素晴らしい国でした。

加古川に一番近い国

高塚　凛

コロナ禍の影響で自分の思うような高校生活を送れなかった私の大学生になってからの目標は、何か新しいことに挑戦することでした。そんな時、この加古川市青年海外派遣が４年ぶりに再開されると聞き、母の後押しで応募しました。

海外には２歳の頃に行ったきりでほぼ初めてで、しかも地球の反対側のブラジルに行くなんて私に出来るのだろうかと不安でしたが、きっと二度とできない体験だろうと思い挑戦してみようと思いました。

事前研修では団員でマリンガや加古川の事について調べて発表したり、ポルトガル語を学んだりして、ブラジルについての知識を得ることで、ブラジルで見る景色やブラジルの人々との交流がより一層楽しみになりました。
日本を出発し２５時間というとても長いフライトを経てブラジルへ到着しました。九一日以上の移動は本当にしんどかったです。しかしこれからブラジルで過ごす日々を想像するととても楽しみになりました。

珍しい食材が多いブラジルのスーパー

１日目はまずサンフランシスコ・ザビエル学校へ訪問しました。学校に入ると生徒のみんながブラジルと日本の旗を持って盛大に私たちを歓迎してくれました。あまりの歓声にとても胸が熱くなり涙が出そうになりました。生徒たちはとてもフレンドリーで気さくに話しかけてくれました。その後の歓迎昼食会では、マリンガ市の方々とブラジルの肉料理のシュラスコを食べました。日本でも一度食べたことはあるのですが、本場のシュラスコは日本とは肉の風味や脂の付き方などが異なっておりとても美味しかったです。野菜は日本のものとは種類や味が微妙に異なっていて、スイーツはとても甘いものが多かったのですが、とても美味しかったです。食べ過ぎてしまい、私を含めほとんどのメンバーが胃もたれをしてしまいました。食後訪れた日本庭園は、強い雨が降っていて、ゆっくりと見ることができませんでしたが、ブラジルの中で日本の風景を感じることができ、新鮮な気持ちになりました。

夕方、ずっと楽しみにしていたホストファミリーのマヌと対面しました。マヌは英語を話すことができ、英語でコミュニケーションをとることが出来ました。とてもフレンドリーに接してくれて緊張もすぐにとけました。家族の皆さんもとても暖かく歓迎してくださり、キャリーケース１個分のお土産をいただきました。私がプレゼントのお礼を言った時「ブラジル人は愛情やお礼を表現するときハグや頬を合わせたりするけれど、私は贈り物をすることで気持ちを表現している」と言い、本当におもてなしの精神が素晴らしいなと思いました。

ホストファミリーとその友人との食事会

夜にはマリンガで開催されている日本文化を紹介するお祭りに行ってきました。盆踊り風のダンスやよさこいのショー、着物の着付け、日系人の生け花や書道の作品が展示されていました。どれも本格的で、日本から遠く離れた場所で日本文化に触れることは、とても不思議な体験であり、現在の日本でもなかなか機会がないのでとても楽しく、ブラジルの人々が日本の文化を大切にしていることがわかりました。

２日目の移動中、マヌは自分の宗教の話をしてくれました。昔、辛くて苦しかった日々を神様が救ってくださり、それからの毎日は神様のおかげで幸せに暮らすことができていると言っていました。私にも毎日お祈りすることでより幸せな日々が続くと話してくれました。ブラジルに比べ私の周りではそれほど熱心に宗教を信仰している人は少なく、私自身も熱心に信仰しているわけではなかったので、一緒に祈ったり、宗教曲の中に日本語の曲があってマヌの友達たちと一緒に歌ったりして、新しい考え方に触れることができてよかったです。

ブラジルの人々は、家族や友達をとても大切にしているということをこのホームステイの期間で実感しました。話す言語が違ってもスキンシップや表情などで想いが伝わる場面がたくさんありました。マリンガでの３日間はとても短く、まだまだ一緒にやりたかったことがあったので、お別れはすごく寂しかったです。

その後、イグアスの滝やリオデジャネイロでコルコバードの丘などを訪れ、とても幻想的で迫力があってずっと感動しっぱなしでした。

この加古川市青年海外派遣を通して、一生に一度と言っていいほど貴重な体験をさせていただきました。いくらその国の文化などを勉強したとしても、実際に目にしてみるまで本当のことは分からないなと思いました。私が思っているよりマリンガ市と加古川市の結び付きは強く、地球の反対側にある国とこのように近くで触れ合えたことで、より深く感じることができました。この経験を生かして、将来、もっともっと私の国際交流をしていきたいと思います。

ブラジルで気付いた日本のこと

谷　星那

マリンガ市と加古川市が姉妹都市提携を結んでいるのは以前から知っており、大学生になれば申し込んでぜひ行ってみたいと考えていました。研修を重ね、日本から遠い国であるのにも関わらず、日本と深い関係にあることを学んでいきました。実際、ブラジルに行くまでのブラジルのイメージは、日本人が移住した国で、多くの日系人が住んでいる、陽気な国、リオのサンバぐらいのイメージしかありませんでした。しかし、実際にマリンガ市を訪れると私のイメージどおりの面と全く違った面があり、実際に訪れたことで初めて理解したことや気付いたことがありました。特に印象に残っていることが２つあります。

プレゼントの浴衣

１つ目は、ブラジル人は日本人以上に日本の文化について知っており、大切にしているということです。ホームステイをしている際、マリンガ市の和太鼓チームの代表の方と話す機会があり、和太鼓のパフォーマンスや三味線のパフォーマンスの動画を見せて頂きました。日本で和太鼓のパフォーマンスを見たことがある人はたくさんいるとは思いますが、日本人でも自分自身が和太鼓を演奏できるという人は少ないと思います。寿司のように、日本食がブラジル流に変化して社会に浸透している様子も目の当たりにしました。このようなことから、ブラジルに移住した日本人から日本文化が現在に至るまでブラジルで大切に継承されていることに気が付きました。そして現在、日本では海外の流行がもてはやされ、まるで日本文化よりも海外文化の方がいいというような考え方があるのではないかと私は感じていますが、地球の反対側にあるブラジルの地に根付いた「日本文化」に触れたことで、日本人として日本の文化をもっと大切にしていく必要があるのではないかと感じさせられました。

２つ目は、ブラジル人の「陽気で誰でも受け入れてくれる」という国民性です。私が話せるポルトガル語は、挨拶ぐらいしか出来なかったので、コミュニケーションを取ることは難しかったですが、たとえ言葉がうまく通じなくても、ブラジルの人たちが私を温かく迎え入れてくれていることを感じることが出来ました。そして、日本で過ごす時間よりもブラジルで過ごす時間はおおらかで、物事は深刻に考えなくてもどうにかなると思える国柄だと感じました。

私を温かく迎えてくれたホストファミリーと

ブラジルという国はさまざまなルーツを持つ人で構成されているためで、外国人であろうがブラジル人であろうが関係なく接してくれるように感じました。それに比べ日本は、１つの民族で大部分が構成されている国なので、徐々に変わりつつあるとは思いますが、日本人でない人を異なる存在だとする意識を持った人が一定数いると言われています。しかし、日本の少子高齢化が進み、外国人労働者を多く受け入れている現在、多様な人々を寛容に受け入れられる意識を持たなくては、今後、日本がさらなる国際化に対応していくことは難しいと思います。よって、日本人もブラジル人のように外国人を温かく迎える心を見習うべきだと強く感じました。

そして今後は、私がブラジルで感じたことや新たに得た経験を周囲の人に伝えていくとともに、異文化への理解をさらに深めるために、在住外国人に日本語を教える日本語ボランティアや通訳ボランティアに参加していきたいと考えています。いろいろなバックグラウンドを持つ人と交流することで自分自身の知見を広げ、加古川市に住む外国の方々のサポートをすることができればいいなと考えています。そして、将来的には、日本に住む外国人のサポート、もしくは日本と外国をつなぐような人材となり、社会に貢献していきたいです。

ブラジルと日本

成瀬　照真

ブラジルに行くことが決まり、僕の不安はどんどん膨らんでいきました。なぜなら僕は海外に行ったことが無かったからです。今、考えてみると初めての海外というだけでなく、異文化に対してある種の恐怖心を抱いていたのだと思います。言語が通じるかどうかもわからないし、異なった文化や考え方なども当然違う人たちとうまくやっていけるのか？そんな不安から来ていたのだと思います。

事前研修を重ね、ブラジルのことを知っていくうちに、不安も期待へと変化していきました。初めての飛行機、しかも２５時間という長時間のフライトで疲れはしましたが、機内で隣の席の外国人とコミュニケーションを取ろうとチャレンジしました。英語で話しかけたのですが、うまく通じず、困っていた時に日本語で「どうしよう」と言ったら「私、日本語喋れます」ととても流暢な日本語が帰ってきてとても驚きました。その後、日本語でブラジルについて様々なことを教えてもらいました。機内ではそのほかの方々とコミュニケーションをとることもでき、とても楽しかったです。

ホストファミリーとお出かけ

ブラジル到着後、ホストファミリーと初対面し、緊張のあまりうまく喋れませんでしたが、暖かく僕を迎えてくれました。大学生のジョバンニさんは日本語を話すことができましたが、彼の両親とお兄さんは、日本語も英語も全く話せなかったので、ジェスチャーやスマートフォンの翻訳機能を使ってコミュニケーションをとりました。多少の不便さを感じましたが、意図が伝わった時はとても嬉しかったです。ホームステイでは市場や日本庭園、インガ公園、大聖堂など様々な場所に連れていってもらったり、家で一緒に料理を作ったり、僕が日本から持ってきたボードゲームや折り紙などを一緒に楽しみました。ホストファミリーは、日本料理が好きで、寿司や焼きそばなどの和食をよく食べに行ったり作ったりしているそうです。滞在中も毎朝、緑茶を飲んだりしており、日本の文化を感じることができました。

日本文化祭の様子

ブラジルで生活をしていて、僕のホストファミリーのように日本文化が思っていたよりも生活の中に根付いていることにとても驚きました。車で町を移動している時も寿司屋や焼肉屋といった日本料理店を多く目にしました。

ホストファミリーと日本文化祭というイベントに２日連続で行ったのですが、そこでは盆栽や生け花が展示され、書道や折り紙など様々な日本の文化が紹介され、さらに、日本料理や盆踊りなども楽しむことができました。その他にも、日本庭園や日本の漫画、駄菓子など数多くの日本文化をマリンガで触れることができました。でも、マンゴーが入っている寿司や油で揚げてある寿司もあり、ポップな音楽で踊る盆踊りなど、日本と違った独自の進化を遂げていて、ユニークさを感じました。

マリンガでは日本語を上手に話す方がたくさんいて、日本に対しての理解がとても深いと感じました。一方、自分がブラジルについてあまり知らなかったように、日本ではブラジルに対して理解があまり進んでいないと感じました。

このようなことから、今回の派遣で学んだブラジルの文化や魅力について、もっと多くの人に広めるために、まずは身近な人にこの派遣研修で得た、貴重な体験や現地の文化など感じたことをきちんと伝えたいと思います。そして、日本と外国の人たちを繋げるような活動に積極的に参加していきたいと強く思っています。

僕はブラジルの人々に対して、陽気でグイグイくるイメージを持っていました。確かにブラジルの人々は陽気でしたが、それは僕たちのことを迎えてくれる優しさから来ているものであり、相手を元気づけたい気持ちの表れということが、体験を通して分かりました。僕はこのようなブラジルの人々の精神を尊敬しています。また、そこが日本人とブラジル人が人を迎える文化や精神の大きく異なるところでもあると思います。ブラジルで得た貴重な経験や気付き、知識をこれからの人生に生かしていきたいです。

地球の反対側にいる家族

前川　圭太郎

まさか初の渡航がブラジルへの海外派遣によるものだとは、夢にも思いませんでした。

５月に母がこの派遣事業募集を見つけ、思い切って応募してみようと思ったのが始まりです。この小さな一歩がすべて運命なのかなと、今思えばそう感じます。地球の反対側にいる人たちが僕たち日本人の文化をどう思っているのか、そして、地球の反対側にはどのような人、どのような文化があるのか、わくわくで胸を膨らませながら、出発の日を迎えました。

合計約２４時間のフライトを経てサンパウロ空港に着き、活動は翌日から始まりました。その日はサンフランシスコ・ザビエル学校や市役所を訪問しました。学校では特にすごい歓迎で、胸が熱くなり、来た甲斐があったと思うとともに、生徒のみなさんの日本への強い思いを感じました。夜にはホストファミリーと対面しました。ホストファミリーは警察官の大家族だと聞いており、少し緊張していたのですが、とてもいい人で安心しました。

ともに朝食

その日から、３日間のパーティーづくめの日々が始まりました。ホストファミリーとその友達と一緒に行動することが多かったのですが、日本語や英語を話せる人が多く、コミュニケーションにも全く困らずすごく楽しかったです。一人一人が果てしなく陽気で、この人たちの体力はどれだけあるのだろうと思わせるほど、人生を本気で楽しんでいる感じがしました。また、全然知らない人に話しかけても、瞬なく打ち解けてくれました。本当にみなさんが、僕を快く受け入れてくれ、とてもうれしかったです。

滞在中には、マリンガでも最大規模の日本文化祭というイベントが開催され、盆踊りや和太鼓の演奏、着物を着ている人がいるなど、日本文化を大切にしていると思いました。特に和太鼓は、すごい迫力で、日本のものと遜色なくて、たくさん練習したということがよくわかりました。また、そこで食べた日本食は、ブラジルの濃い味が日本食といい感じに融合されていて、食べ応えがありました。さらに、日本語学校の生徒がセレモニーで日本の音楽に合わせて、ダンスや楽器を演奏してくれ、これもまた、クオリティが高く、日本の音楽や言語を使っていたので、まるで日本にいるかのような気分になりました。その後、みんなでダンスを踊り、改めてブラジルの陽気さを肌で感じました。そもそも深夜にダンスを一時間も踊るなんて初めての経験なので、少し混乱しましたが、すごく楽しかったです。昼より夜のほうがアクティブなんじゃないかと思うほど、ブラジルの皆さんはenjoyな人たちばかりでした。絶対ホームシックになると思っていたけど、いい意味で、そんなことを考える暇なんてありませんでした。それだけ自分も、無意識に楽しんでいたのだと思います。

日本文化祭で集合写真

翌日も初日以上にいろんな人と交流を深めることができました。日本のアニメの話もして楽しみました。僕より日本のアニメを知っていて、本当に日本のアニメは世界で愛されていると実感できました。ホストファミリー宅に帰り、朝の３時まで話し込んで、彼らの日本に対する思いを聞かせてもらいました。驚くべきことに、みんな本当に日本のことが大好きで、日本に行ってみたいと言っていました。僕の片言の英語と慣れないボディランゲージをとても真剣に理解しようとしてくれて、やはり、言語の違いに関係なく、相手に事を伝えるのに大切なのは気持ちだと思いました。

日本から一番遠い場所でも、日本の文化はブラジルに移住された方々から大事に引き継がれ、愛され、そこには日本語でもポルトガル語でも表わせない何かあたたかいものがあると感じました。一つ心残りがあるとすれば、ホストファミリーの方と本当に仲良くなったのに、すぐにお別れとなってしまったことです。もっと話をして交友を深めたかったです。ブラジルは地球の反対側で距離的にはとても遠いけど、心の距離はブラジル、マリンガのみなさんの優しさで十分近づけたと思います。

この加古川市青年海外派遣は僕の１５年間の人生史上最高に楽しい十日間になり僕の一生の宝です。もっとポルトガル語を勉強し、日本の文化をもっとたくさん伝えられるよう成長して、ブラジルに行きたいです。

マリンガで学んだ異文化交流のあり方

芳本　協佳

高校生の頃、ブラジルのマリンガ市からの派遣生を、ホストファミリーとして受け入れたことで、マリンガ市と加古川市が姉妹都市であり、長年にわたり交流を続けていることを知りました。この派遣生との交流がきっかけとなり、将来、私もマリンガ市を訪れてみたいという思いが芽生えました。

ブラジルでは、出会ったすべての人々が心から私たちを歓迎してくれたと感じました。特にサンフランシスコ・ザビエル学校を訪れた際に、生徒たちが熱烈に出迎えてくれたことには驚きと嬉しさがこみ上げ、思わず涙がこぼれました。これまでに何度か海外の学校を訪れた経験はありましたが、歓声と共に旗を振って迎えてくれる姿は初めてでした。日本の反対側に、私たち日本人が訪れることを心待ちにしてくれている場所があるということを実感し、非常に感慨深い瞬間でした。サンフランシスコ・ザビエル学校には、母親を幼少期に亡くした日系の生徒もおり、私たち日本人との交流を楽しみにしてくれていて、その姿に深い感銘を受けました。

ホストファミリーと自転車で公園一周

ホームステイでは16歳の女の子がいる3人家族にお世話になりました。ホストファザーは日本人で、ホストマザーは日系人でした。そのため、家では基本的に日本語でコミュニケーションを取り、特に日本の家庭との違いを感じることはありませんでした。ホストファミリーは非常に親切で、私が疲れているだろうと思って、毎日お湯を張ってお風呂に入れてくれました。また、私が運動不足でお腹が空かないことを相談したところ、朝から市場に連れ出してくれたり、ピクニックに誘ってくれたり、公園に案内してくれたりと、私の体調に気を遣ってくれ、快適に過ごすことが出来ました。私は、ホストマザーが初対面の人でも友達のように話しかけていたことが印象的で、ホストマザーにそのことを伝えると、彼女はこれが普通だと言いながら、以前、日本を訪れた際に日本人のシャイな性格に戸惑った経験を語ってくれました。

また、マリンガでは、私がホストファミリーとして受け入れたブラジル人と再会する機会がありました。以前、私の家にホームステイした友だちに再会したいとホストマザーに伝えると、すぐに知り合いに連絡を取ってくれて、その日のうちにその友だちと再会できるよう手配してくれました。友だちも「今どこにいるの？すぐ行くよ！」と、自分の用事を後回しにして会いに来てくれました。ホストファミリーの協力で、友だちと過ごす時間を作ることが出来、彼の家族と夕食を共にしました。日本の反対側にいる友だちに再会出来たことは非常に嬉しかったです。

朝市でお買い物

加古川市青年海外派遣事業に参加したことで、今後の異文化交流における自身の目標や方向性を考える機会が得られました。同時に、国際協力における自身の役割や貢献方法を再考し、新たな目標を設定する契機となりました。現在、日本語ボランティアを通して在住外国人との交流を続けていますが、自身に何が出来るのか、また何が必要とされているのかを十分に把握できておらず、自分の目指す国際協力の明確な方向性がまだ定まっていませんでした。今回のブラジル訪問において、ポルトガル語が公用語である環境に身を置き、多くの人々がポルトガル語しか話せないという状況を経験しました。ポルトガル語が中心の会話の中で、時折言葉の壁を感じ、孤立感を感じ心細く感じることもありましたが、周りの人たちの支えがあったおかげで、楽しく充実した日々を過ごすことができました。

この経験から、言葉がコミュニケーションの障壁になる場面でも、在住外国人が心細く感じないよう、彼らを支えることを自身の目標としたいと思います。そのためには、ブラジル人のように相手のために何かしてあげたいという思いを持ち、心から彼らを歓迎する姿勢を持つことが大切だと考えています。さらに、異なるバックグラウンドを持つ人々のことを理解できるよう、異なる文化や習慣についても理解を深めようと思います。異なるバックグラウンドを持つ人々と対話することで、新たな視点を得ることが出来、自身の成長にもつながると考えています。今後も日本を訪れる外国人にとって快適な場所を提供し、彼らが安心して滞在できるよう、積極的に日本語ボランティアを通じて交流を深めていきたいと思います。